

主於大場八谷二村。永知計田二百三十餘畝。以爲金湯。偶暨至寬文中。檀越橫山外記信士。橫山志摩信士及香齋道喜等。奉加賀守中將居士之令旨。請教余開法。改臨濟宗旨。爲洞上玄風。余不敢喜。乃辭三次。檀心不休。及到第四次。堅請以國命。余於是始應。庚戌歲中冬月入山開法。專則太白舊規。新振永平眞風。將來有兒孫。不事華屋玉樹。不必腴菜珠飯。單傳曹溪之嫡脉。繼奏新豐之古曲。檀越暨香齋等使。余改新之本志滿矣。設復不則。將個黃龍山。變作野狐窟耳。また寺記に云ふ。獻珠寺は、元、山號を金龍山と號す。黃壁高泉來るに及びて、横山氏より請うて開山の如くせんとす。此の時明法山と改む。高泉去りて後元の金龍山に復すと。又云ふ。開山遠山、寛文七年五月二日寂す。其の後久々無住に成り居たり。其の間に曹洞の月坡和尚三年寄寓す。後天徳院に住し、第二世となる。高泉の來寓するも無住中の事なり。高泉去れる後嵩山と云ふ僧獻珠寺に住し、妙心寺末寺に復す。元祿の末年なり。是を當寺の二世とすと云々。

○開基海元院尼小傳

海元院は四百石を賜はり、獻珠寺を建立して、己が知行の内三十石を寺領となしたり。故に國事昌披問答にも、海元院知行之内三十石寺領に被仰付とは載せたるなり。

○月坡和尚傳

月坡は、獻珠寺中興の祖也。月坡禪師語錄に載せたる傳に云ふ。禪師諱道印。字月坡。江州大津人。姓源。本貫佐々木一擊。因祖父逆鄉黨。遁陷民間矣。母大倉氏一夕夢。倚欄採菊華。覺有娠焉。以九月重陽日而生。寛永丁丑年也。とあり。富田景周の燕窩風雅に云ふ。月坡自號老臥佛。初依竹龍還和尚受業。得書習初贖。不待和尚訓。大半解其義。平素以藥利不挂眼。冬夏一直襪。内外一袈裟。師確乎不移。坦夷難險。安樂勞苦。只禪是力。寛文十年十一月以松雲公命入黃龍山。改臨濟宗旨。而爲獻珠寺中興開祖。事詳月坡所自叙獻珠寺改新中興志。又院主金龍天徳。長詩文圖雅及贊。有月坡集十卷。詩偈靈活。錄之銳不可當。云々。と載せたり。按ずるに、月坡禪師語錄に載せたる安永九年雲臥道人の序に、師所撰之雖有江湖唱和集。不流於世不得視。最爲遺憾矣。とありて、唱和集は和歌を集録せしもの

延寶二年獻珠寺由來書に云ふ。當寺は横山外記之老母海元院尼、爲母一寺建立致度旨、微妙公へ海元院尼より被申上處、則寺屋敷被下、慶安四年に建立、寺領之儀は微妙公へ海元院尼願之趣有之、三十石寺領被仰付。と見ゆ、國事昌披問答には、海元院知行之内三十石寺領に被仰付とあり。獻珠寺過去帳に云ふ。獻珠寺は臨濟宗京都妙心寺の末寺也。開祖遠山和尚は、幼少より海元院己が子の如く養育し、寺を建立するに當りて遠山を開山とす。海元院の母は獻珠院と號し。神谷信濃守の室也。因りて寺號を獻珠寺と稱すとあり。按ずるに、横山譜に、外記氏從の父式部長治の室は、神谷信濃守守孝の娘にて、後海元院と號すとあり。三州志體雜餘考に云ふ。神谷信濃守守孝、後丹波守と稱す。男子なし。故に横山山城守長知の三男長治を女婿に命ぜられ、神谷式部と號す。然るに慶長十年横山因幡卒する時、式部を因幡の嗣子に命ぜられ、再び本姓に復し、横山式部とす。依之寛永六年神谷丹波守孝卒せし時、遺知九千石の内四百石を長治の室へ賜はり、三千石を長治が子式部長昌へ賜はり、命に従つて神谷丹波と號すといへり。されば長治の室

なりといへり。

○明僧高泉寓居

三州志來因概覽附錄に云ふ。寛文十二年松雲公、明僧高泉和尚を召し、獻珠寺に寓居せしむる事一年餘。其の師隱元延寶元年に寂するを以て、一旦金澤を去り、元祿二年再び聘に應じ來り、亦獻珠寺に寓居す。此の時天徳院中に祖廟。佛殿等を造立の事あり。其の造様の指法を高泉に命ぜられ、同七年に落成し、高泉三月東歸す。凡そ金澤に掛錫前後八年といへり。平次按ずるに、江沼郡山代神明社舊神官武田氏、高泉和尚山代入湯の時、所作の詩草を所藏す。其の寫左の如し。

感涕湧空井。入池作暖波。時々含瑞氣。往々滌沉痾。大抵無嚴冷。自然有太和。要明妙觸處。問取頭陀羅。

癸丑冬到賀州山代溫泉作。黃壁高泉山僧草。

右は延寶元年癸丑の冬なれば、一旦金澤を辭し東歸せし時、山代の溫泉へ入湯しての作詩なるべし。その肉筆今に傳來して珍藏すといへり。又獻珠寺にも高泉和尚寄寓の頃携帶の物品、于今傳來して寺の什物とす。